

# 図書館通信 — 77 —

1986. 10

## 電算機システムの導入について

附属図書館長 中村博保

本学図書館も電算機システムが導入され、新しい時代を迎えることになった。以下、導入の経緯について簡単に報告し、全学の理解を得たいと思う。

最近の研究領域の拡大と水準の高次化、それに伴う情報資料の増大化に対処するため、本学図書館が、学術情報ネットワークへの参加と図書館システムの電算化の方針を決定したことは、すでに本通信その他で報告したとおりだが、昨年末、図書館業務電算化のための概算要求が認められ、62年2月の始動をめざして、作業が進められることになった。導入は下記の順序で行われた。

昭和61年3月14日の図書館委員会において、業務電算化に関する実施計画の策定と導入機種決定を、図書館業務電算化委員会に委託することを決定した。

4月22日の図書館業務電算化委員会において、図書館委員会の要請にしたがい、業務電算化実施計画を検討、策定した。また、電算機システム導入の具体的手順について検討し、委員会のなかに機種選定の専門グループを発足させることとした。機種選定委員会は、阿部圭一（委員長・工学部）堀江雅幸（教育学部）小沼茂樹（理学部）斎藤現太郎（図書館事務部長）松村忠文（整理課長）徳山博陸（閲覧課長）の6名をもって構成し、他に図書館から数名のオブザーバーを参加させることとした。

5月13日、図書館委員会において附属図書館業務電算化実施計画が承認され、機種選定委員会は早速具体的な作業に入り、計4回の委員会をひらいて、慎重な選定作業を行った。

日本IBM、ファコム・ハイタック（日立製作所）、日本電気、富士通、沖電気、三菱電機の6社に対してシステムの提案を求めた結果、日本IBM、日本電気、ファコム・ハイタックの3社からそれぞれの機種の提案があった。その後、日本IBMから

辞退の申出があり、日本電気、ファコム・ハイタック両社提案の機種について説明会を開催し、システム構成の説明を聴取、詳細に検討を行った結果、第4回の最終委員会において、日立製作所製HITAC L-470 Xシステムが最適であるとの結論を得た。

6月27日、館長は、機種選定委員会の正式答申をうけて、7月14日の第2回業務電算化委員会にはかり、HITAC L-470 Xシステムの採用を正式に決定した。また上記の経過について、9月12日の図書館委員会に報告を行い、了承を得た。

本学図書館は、東部本館と浜松分館が80キロ離れるという条件をかかえており、予算の限られた本計画は、構想の段階から大変な困難が予想されたが、本省に事情を説明した結果、本省が回線費用を負担してくれる見通しが得られ、当初から本館・分館を統合したかたちで電算化することが可能となった。

当面は、予算が許す範囲で、受入れ業務、貸出し業務、雑誌管理業務を中心に電算化のための作業をすすめ、目録業務は、全学の合意が得られた段階で実施したいと考えている。

今後、機器の搬入と設置、SE（システムエンジニア）と共同のシステム開発などの作業がはじめられるが、本図書館はすでに、実施計画の検討および作業の具体的計画を担当する業務電算化計画検討部会と、検討部会の方針に基づき作業の実際に当たる同作業部会の二部会に全館職員が所属するかたちで対応が進められてきており、本図書館の将来の基礎をつくる今回の電算機システムの導入も、円滑かつ的確に作業が進められるものと期待している。

なお、本図書館は、学術情報システムについては、1年間の学習期間を経たのち、昭和63年4月からの本格的参加を予定している。

〈私のすすめたい本・54〉

## 『平静の心——オスラー博士講演集』

岡田 麗太郎

私が最近読んだ書物の中から大変興味深く、強い感銘を受けた次の本の一読を学生諸君におすすめしたい。それは医学書院から出版されている\*『平静の心——オスラー博士講演集』（日野原重明・仁木久恵訳、pp.514、¥3,800-）である。

ウィリアム・オスラー博士は1849年カナダに生まれ、モントリオール市のマギル大学医学部を卒業して医師になり、26歳で母校の医学原論（現在の生理学）の講師に迎えられた。33歳の若さで米国ペンシルベニア大学医学部の内科教授に就任し、40歳で米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部創設に参画した。その後15年間、ジョンズ・ホプキンス病院を中心に教育・研究・診療に献身した。55歳のとき、請われて英国オックスフォード大学の欽定教授となり、教育と社会医学的活動を続けて1919年に病没した。ほぼ1世紀も以前に活躍した医学者オスラー博士の思想・人生哲学が医学の発展の目覚ましい現代においても、非常に新鮮で、深い内容をもつことに驚きを禁じ得ない。

1904年、当時ジョンズ・ホプキンス大学医学部の内科教授であったオスラー博士は医学生、看護婦、医師などを対象として行った18回にわたる講演をまとめて *Aeguanimitas*（平静の心）と題する講演集を出版した。講演集の題名「平静の心」は博士が1889年に前任校のペンシルベニア大学を去るにあたって行った告別講演の題名である。本書はこの講演集から15篇を選び、他の3篇の講演を加え、併せて18篇の格調高い講演内容の完全翻訳である。一部の講演にはかなり難解な部分もあるが、詳細な訳者注に助けられて熟読すると、臨床医として、研究者として、教育者として、また人道主義者としてのオスラー博士の生きざまがひしひしと感じとれる。特に、本書の17篇目の講演「生き方」(A Way of Life)は若者に対する呼びかけで、博士の言葉と精神が学生諸君に強烈な印象を与えるものと思われる。オスラー博士の医学生向けの講演の中では、これは「平静の心」と共に最も有名なもので、英米ではこの原稿が一冊の小冊子として出版され、多くの医学生に愛読されているという。オスラー博士の力説する教養(カルチャー)、科学(サイエンス)、医術(アート)に対する彼の見解は何も医療専門職に従事する人々ばかりでなく、あらゆる分野の人々に強い刺

激(感銘)を与えるものである。

オスラー博士は次のような人生指針を学生諸君に示している。その第1は超然の術である。どのような環境におかれても、それに煩わされることなく、それから逃れられるように自己を抑制する習慣を養うことをすすめている。すなわち、如何なる状況にあっても、絶えず物事に集中できる能力を養うことである。第2は系統的方法の徳である。毎日繰り返す諸事を効率のよいシステムの習慣とするならば、それが天性となる。彼は早朝に勉強することをすすめて、これを習慣化するようにと述べている。第3は物事を徹底して行う特性で、物事に徹することの重要性を説いている。最後に謙遜の徳(the grace of humility)をもつことをすすめている。博士の人生訓は、今日のような自己主張の強い時代に、我々はどう生きるべきかを強く示唆しているように思われる。また、博士は読書の重要性について次のように述べている。「就寝前の30分間本を読み、朝目覚めたときベッドサイドのテーブルの上に本が広げたままであってほしいと思う。1年の間に読書量がどれほどになるかを知って驚かれるであろう。あらゆる世代の偉大な精神の持ち主が書き残した書物を通して、学生時代にじっくり学んでおけば、私の申しあげる精神の教育に役立つと思う」と。

本書の末尾に「ウィリアム・オスラー卿の生涯とその業績ならびに思想について」と題して日野原氏が一文を寄せており、オスラー博士の生涯の概要と彼の思想を知る上で大いに参考になる。カナダで生を受け、米国で活躍し、晩年には英国に落ち着くというオスラー博士の波乱に満ちた人生は、まさに一篇のドラマ以上のものがある。博士の講演の対象者は当然、医学生や医療専門職に従事する人々に向けられてはいるが、医学や医療に直接関わりのない人々にとっても彼の人生観はまことに味わい深いものがある。本書を通読して、私自身オスラー博士の生き方に共感し、啓発されるところ大であったので、学生諸君にご紹介した次第である。

〈教育学部・生物化学〉

〈私のすすめたい本・54〉

## 志賀直哉著『暗夜行路』・宮沢賢治著『春と修羅』

大 嶋 仁

私はここで、学生であれ教職員であれ、文学好きの方々に二冊の本をすすめようと思う。

私の専門は比較文学で、比較文学とは、一国文学の研究とは違い、複数の国の文学を射程に入れ文学を国際的ないしは世界的視野において論じようというものである。私は、この比較文学の見地から見て、重要とおもわれる二冊の本を、ここに推したいのである。

とはいえ、私は比較文学の専門の書をすすめようというのではない。むしろ、恐らくは多くの人々が既に読んでいるであろう近代日本の名作を、二つほど推薦しようというのである。

比較文学の立場からなら、何故外国文学を推さないのか、といぶかる方もあろう。しかし、私とすれば、比較文学をやればやるほど、翻訳文学は好ましくない読物であるとの感を強めている。翻訳とは裏切りであると言われるが、このことは文学については特に本当だと思う。文学とは言語の精華なのだ。どうして、他の言語によってそれを表現し得よう。

そんなことを言うと、上田敏の「山のあなたの空とほく」は名訳ではないか、と反論されるかもしれない。しかし、あれは、私に言わせれば名訳ではなく、名作なのである。文学を本当に愛する者は、やはり翻訳の限界というものを肝に銘ずべきであろう。

私がお勧めするのは、志賀直哉の\*『暗夜行路』と宮沢賢治の\*『春と修羅』である。いずれも文庫本で手に入るもので、多くの家の書棚に見出し得る書である。これら二冊が何故おもしろいのか、それは、世界文学の立場から、これらが深い象徴性に満ちた文学作品だからである。

そもそも、近代日本文学というと、写実のもとに発達してきた。このことは、せつかく江戸時代までに発達させていた象徴性を奪うことになったと言える。芭蕉の句などの偉大さは、私に言わせれば、それが「造化」を写しているようで、実は我々の無意識下にある象徴世界を照し出しているからで、こうした象徴性こそが、近代日本では失われてきたのだと思う。その点で、『暗夜行路』と『春と修羅』とは、その方向は真反対であるが、すぐれて象徴的作品だ、というのである。

『暗夜行路』にリアリズムや私小説性を読み取

る眼は、一種の定説を生んでいるが、そうした眼には、そこにある近親相姦の主題の世界性あるいは人類性は映らないであろう。しかも、そうした眼は、作者の筆が、主人公の潜在的欲望の象徴化されたものとして世界を描くさまを、全くと言ってよいほど看過するであろう。実は、『暗夜行路』は、そうした欲望の象徴化されたものとしての世界の、浄化過程を扱っているのである。それは、ある意味では精神分析的な作品である。

一方、『春と修羅』は、これもまたそこで描かれている世界は、「象徴の森」である。しかも、作者が言うように、その世界は「心象」なのであり、その「心」は救済を希う心なのである。そこでは一切が「聖」なるものの顕現として描かれている。そして、そこにこそ『春と修羅』の特異な魅力と普遍性があるのである。この賢治の象徴の世界は、聖書の黙示録的な世界と相通ずる処があると思われる。

『暗夜行路』と『春と修羅』、奇妙な取り合せのように見えるだろうが、二冊とも象徴性の深さにおいて近代日本文学中の傑出した作品である。一方は、欲望という形而下的なものの象徴化を描き、他方は「聖」なるものの顕現としての世界を描くという点で対照的であるが、『春と修羅』にも生身の「情炎」がちらつくと同様、『暗夜行路』にも精神の浄化作用が見られるのである。この二作品には全く交点がない、とも思われぬ。

いずれにしろ、文学好きの方々なら、こうした作品を二度も三度も読んでくださるであろう。そして、色々と考えをめぐらせて下さるであろう。そう思って、以上二冊をすすめさせていただいた次第である。(了) <人文学部・比較文学>

(\*印は本館所蔵を示す。なお志賀直哉と宮沢賢治の全集が開架にあります。)

## 《導入電算機システムの紹介》

L-470 X は、日立 L シリーズ、オフィス・コンピュータの中位機種で、処理装置、入力装置、端末装置、通信制御装置で構成され、オペレーティングシステム VOS 0/ES のもとで運用される。

### 1. L-470 X プロセッサ (CPU・中央処理装置)

主記憶装置 (4 メガバイト) のほか、基本演算処理や入出力処理などを行うユニットが組み込まれている。オペレータコンソールは、端末装置のうちのひとつが兼用され、通常のシステム運転・制御のほかシステム障害等の監視・情報採取をすることができる。

### 2. 入出力装置

#### (1)磁気ディスク装置

図書・雑誌等の書誌情報およびそれらの所蔵情報、利用者情報、貸出情報などを収容し、オンラインでの業務を提供するための磁気ディスク装置は 1 ギガバイト (カナ英数字で 10 億字、漢字で 5 億字分) の記憶容量を持っている。

#### (2)磁気テープ装置

通常使用されるデータ記憶媒体では、もっとも安価で輸送に便利なもので、各種データのバックアップ作業や、学術情報センターとの一括更新データの交換などに用いられる。

#### (3)プリンタ類

毎分 100 行プリント可能な漢字ラインプリンタのほか、各種 ID ラベルを印刷するための OCR ラベルプリンタ、端末に連動した毎秒 60 字程度を打ち出すワイヤドット・プリンタがある。

### 3. 通信制御装置

同期通信アダプタ、モデム・インターフェース・コントローラ (MIC)、プロトコル・コンバータ (PC) は、NTT のパケット交換サービス (DDX-P) を介して、学術情報センターとのオンラインによるデータ交換を行うのに必要な装置で、これらにより、本システムの端末で学術情報センターのスクリーン・エディタを扱うことができる。

また、浜松分館との間は、公衆回線で結ばれ、浜松においても、本館内の端末を扱うのと同じ操作ができる。

### 4. 端末装置

本館内に 4 台、分館内に 2 台あり (1 台は、スタンドアロン型で、両者の間のデータ交換は、フロッピー・ディスクを介して行われる)、それらは、

次のような種題がある。

- (1) ネットワークを通じて学術情報センターの目録システムを利用する際に必要な機能、たとえば目録のための特殊文字のアルファベットの入力・表示などをそなえたもの (「目録端末」)
- (2) 貸出用の付属 OCR ハンドスキャナを装備したものの (パーソナルワークステーション 2020 を使用し、スタンドアロンのマイコンとしても利用できる)
- (3) 通常の標準的なもの (T 560/20 ビデオデータ・ターミナル)

また、それらの端末と中央処理装置を結ぶ信号ケーブルは、本館内に 16 台までの端末を置くことが可能なように付設されている。

### 5. マシンルームと電源・空調設備など

マシンルームは、当初 5 階の特別資料室を予定していたが、使用のしやすさ、空調の効率等を考慮した結果、4 階の小会議室を使うことにした。

### 6. ソフトウェア

#### (1)オペレーティングシステム

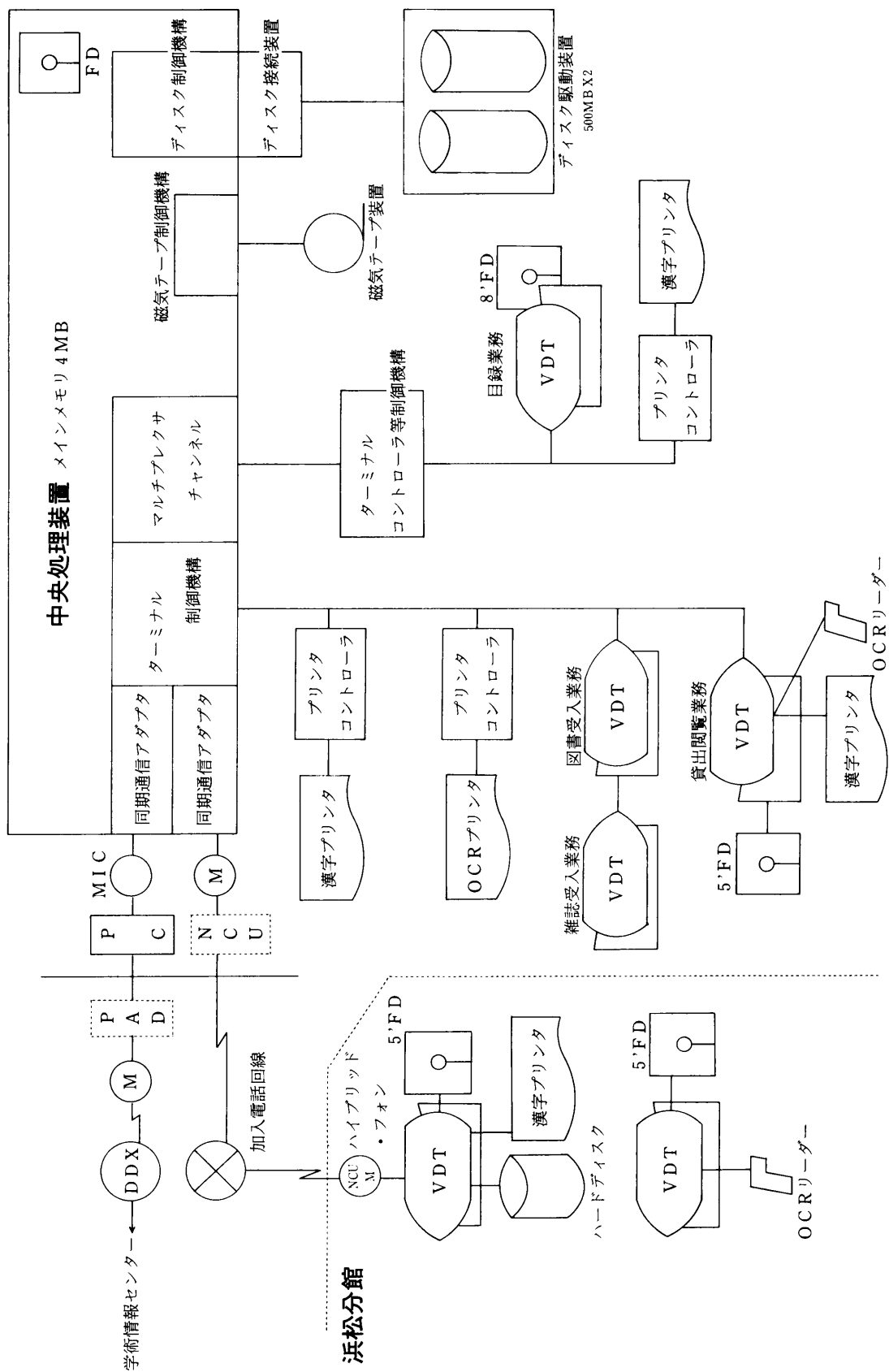
VOS 0/ES は、日立 L シリーズ用のオペレーティングシステムだが、同社の上位機種用である VOS 1~3 (東部電算機室の M-150 は VOS 3 である) と統一された開発思想の基に位置づけられており、将来の機械化業務の拡大、データ量の拡大に対し、十分な拡張性を持っている。

#### (2) LOOKS/U

実際の業務は、日立の大学図書館向けアプリケーション・パッケージの LOOKS/U によって行われる。オンラインでの業務は、すべてスクリーン形式によって進められる。(なお、本パッケージには学術情報センター接続用ソフトウェア LOOKS/U-NET が含まれている)

導入システム構成図は次のようになる。

システム構成図 (機器構成図)



昭和 60 年度図書館統計

■利用統計

(1) 貸出・閲覧

本館(学部別)

区 分	利用対象者数	閲覧(冊数)		貸 出 (冊数)		
		出 納	開 架	出 納	合 計	
学 部	人文教育	734	4,759	8,752	2,331	11,083
	理 農	1,022	2,911	8,811	1,177	9,988
	教 育	364	72	5,551	77	5,628
	農 工	299	46	1,532	21	1,553
生 育	人文教育	747	305	3,125	143	3,268
	理 農	1,037	744	4,092	276	4,368
	教 育	405	135	3,090	77	3,167
	農 工	320	59	1,127	21	1,148
院 生 等	991	125	2,166	47	2,213	
院 生 等	302	560	2,087	668	2,755	
小 計	6,221	9,716	40,333	4,838	45,171	
教 職 員	教職(職員)	742	—	575	4,739	5,314
	研究室	—	—	—	6,480	6,480
	小 計	742	—	575	11,219	11,794
学 外 者	—	614	—	—	—	
合 計	6,963	10,330	40,908	16,057	56,965	

浜松分館(層別貸出)

区 分	貸 出 冊 数
学 生	6,159
院 生 等	2,230
教 職 員	1,079
合 計	9,468

(2) 貸出・閲覧

本館(学生・分類別)

(冊数)

区 分	閲 覧		貸 出		
	出 納	開 架	出 納	合 計	
0 総記	326	331	69	400	
1 哲学	500	2,478	426	2,904	
2 歴史	923	2,473	824	3,297	
3 社会	1,103	10,273	1,486	11,759	
4 自然	86	12,343	141	12,484	
5 工学	113	1,873	139	2,012	
6 産業	139	1,404	178	1,582	
7 芸術	102	2,016	174	2,190	
8 語学	407	1,318	381	1,699	
9 文学	2,161	5,824	1,020	6,844	
雑 誌	4,470	—	—	—	
合 計	10,330	40,333	4,838	45,171	

※上記の貸出冊数以外に、雑誌の一夜貸しが393冊あります。

浜松分館(分類別貸出)

(冊数)

0 総記	172	4 自然	3,280	8 語学	29
1 哲学	21	5 工学	5,350	9 文学	59
2 歴史	26	6 産業	2	雑 誌	452
3 社会	61	7 芸術	16	合 計	9,468

(3) 文献複写統計

区 分	本 館			浜 松 分 館			
	人 数	件 数	枚 数	人 数	件 数	枚 数	
依 頼	学生	651	740	5,542	454	703	5,213
	教官	1,292	1,353	17,263			
受 託	学内	5,725	10,182	39,585	62	98	724
	学外	870	1,214	9,660	274	453	3,330

外国への文献複写依頼(本館)

相互貸借冊数

区 分	件 数	枚(コマ)数
学 生	6	256
教 官	141	2,643
合 計	147	2,899

区 分	本 館	浜松分館
貸 出	10	4
借 用	218	7

■増加図書統計

( ) 内は昭和60年度末の累計

	本 館			浜 松 分 館		
	和 漢 書	洋 書	計	和 漢 書	洋 書	計
0 総記	877 (32,386)	186 (8,565)	1,063 (40,951)	61 (3,411)	0 (800)	61 (4,211)
1 哲学	1,014 (22,190)	595 (13,474)	1,609 (35,664)	8 (2,928)	13 (552)	21 (3,480)
2 歴史	1,674 (41,165)	481 (7,971)	2,155 (49,136)	10 (1,609)	1 (215)	11 (1,824)
3 社会	5,990 (120,650)	2,511 (37,530)	8,501 (158,180)	35 (3,361)	0 (425)	35 (3,786)
4 自然	1,526 (55,050)	2,154 (46,970)	3,680 (102,020)	694 (22,853)	1,160 (27,277)	1,854 (50,130)
5 工学	808 (20,255)	217 (3,621)	1,025 (23,876)	1,135 (32,050)	680 (19,803)	1,815 (51,853)
6 産業	858 (33,147)	306 (6,679)	1,164 (39,826)	11 (626)	1 (24)	12 (650)
7 芸術	638 (17,064)	84 (2,708)	722 (19,772)	10 (1,704)	0 (272)	10 (1,976)
8 語学	971 (16,180)	466 (10,749)	1,437 (26,929)	35 (3,003)	11 (2,117)	46 (5,120)
9 文学	1,912 (48,412)	944 (31,338)	2,856 (79,750)	7 (3,614)	0 (823)	7 (4,437)
計	16,268 (406,499)	7,944 (169,605)	24,212 (576,104)	2,006 (75,159)	1,866 (52,308)	3,872 (127,467)